

報告

臨地実習指導における教員の教育的省察 — 看護教員の実習指導能力向上への取り組み —

渡部 洋子¹⁾、相馬 朝江¹⁾、赤松 弥生¹⁾、神津 朋子¹⁾、豊田 修一¹⁾

要旨

看護学部における平成19年度のFD活動は、教員のニーズ把握をもとに全6回にわたり実施した。臨地実習指導を主テーマとし研修企画にあたり大切にすることは、教員の指導経験を活かす、助手や教育経験の浅い教員のステップアップに繋げる、各教員が抱える指導上の課題を考える機会とする、こととした。その結果、研修は領域を超えて実習指導上の情報を共有することからスタートし、指導経験や職位の違うもの同士がそれぞれの実習経験をもとに考えを自由に述べ合うことができた。このことにより、学生のやる気を育てる関わり方、教員のゆとりの必要性、臨床指導者と教員のコミュニケーションの困難さなど、実習指導上の重要な課題について様々な立場から意見を交換し、考えを深めることができた。その過程において教員各人の自己の臨地実習指導上の課題が明確にできた。今後このような研修を継続させ、個々の教員が成長していくことにより教育の資質向上が図れるものと考えている。

キーワード：臨地実習指導、実習指導能力、FD

はじめに

日本の大学でFD (Faculty development) の必要性が求められている今日、看護学部においても教員の資質向上に向けた能力開発への努力は不可欠である。本学部においては、まだFD活動に対する理解や取り組みの姿勢などに学部間、教員間の温度差があるが、昨年度から学部内FD活動を開始した。看護教育においては、特に臨地実習指導における看護教員の看護実践能力の低さが指摘されており¹⁾ 学生の看護実践能力の育成上の課題となっている。看護系大学は、急激に増加したことで、実習施設の不足や看護教員の不足などによる問題が生じているが²⁾、本学においても、①実習施設の不足による施設の分散、②実習施設との関係作り、③実習指導上必要な知識、技術がまだ十分でない教員が指導を担当する、など類似の課題を抱えている。

そこで、本学部教員の研修に対するニーズである臨地実習指導をテーマとし、本学部の抱える課題に目を向けるとともに自分たちの問題意識に着目し、教育能力開発に取り組むことができればと考え、グループワークを中心とした研修を企画した。まず、臨地実習における各領域のねらいや指導内容、指導上の課題などについて情報を共有することからスタートし、領域を越えた組織として教育能力開発への一歩

を踏み出したのでその取り組みについて報告する。

I. 目的

臨地実習指導に関する研修を企画・運営した成果・効果について明らかにし、今後のFD活動の基礎資料とする。

II. 組織としての指導能力の開発を目指して： 臨地実習指導をテーマとし活動計画を企画する経緯

1. 本学部の実習指導背景

- 1) 実習施設を持たないため、複数の実習施設を使用しており、施設の分散および遠隔地という問題を抱えている。そのため、助手は実習施設に行ったままとなり、学内に戻って上司からの指導を受ける機会を持つことが困難ではなかったか。あるいは助手の指導が十分にできない状況ではなかったか。また、当年度は助手の実習配置の決定が遅かったことも影響し、実習準備を十分行えなかったのではないか。
- 2) 教員の交替などにより、実習施設側との関係作りが求められ、実習指導体制を作り上げていく上での調整に多くの時間を要したのではないか。
- 3) 本学の教員構成上、講師以上の教員による指導が不十分のまま助手が実習指導に当たらなければな

1) 看護学部

らない状況にあるが、教員の交替、途中採用の教員もいたことで、様々な背景の教員が実習指導を担うこととなった。実習指導する上での知識、技術の確認が十分でなかったのではないかと、等があげられる。

2. 教員のニーズの把握

このような本学部の実習指導上の背景がある中で前期の領域別臨地実習が終了し、教員それぞれが様々な経験をし、多くの課題をもっているのではないかと考えられたため、アンケートによる教員のニーズを把握することとした。

アンケート結果から、FDの方法に対する希望として、

- ①領域を超えた学びの場としてほしい。
- ②講義、演習、実習などの授業に対する意見交換や情報共有の場にしてほしい。
- ③助手の学習の機会となつてほしい。
- ④教育方法や教授方法の議論の場にしたい。

等が寄せられた。

FDで採り上げてほしいテーマとしては [表1]、臨地実習指導への要望が多く寄せられた。

[表1] FDに取上げてほしい項目

項目	回答者数
臨地実習指導	8
科目間調整	6
教育方法	6
教育の理念・目的	3
人間関係	3
演習指導	2
教育課程	1
ハラスメント	1
現代の学生気質	1

これらの要望を踏まえて研修を企画した。今回、最も希望の多かった「臨地実習指導」をメインテーマに据え、その他の要望である「教育方法」、「科目間調整」、「評価」等については、メインテーマに関わる範囲で扱えるものを内容的に組み入れていくこととした。また、領域を超えた学びができるような企画とする、助手・教育経験の浅い教員へのサポート体制に関する要望が多かったことを考慮した内容とする事とした。

これらのことから、今年度は臨地実習指導をテ

マとし、内容的には、①教員の指導経験を活かせるもの、②助手や教育経験の浅い教員のステップアップに繋がるもの、③各教員が抱える指導上の課題を考える機会とする、研修を企画した。研修時期は、9月から3月の期間で可能な研修回数を考え、全教員を対象とするグループワークを4回、講演会1回、助手を対象とする研修を1回、計6回の研修会を計画・実施した。

Ⅲ. 結果

1. 研修の実際 [表2]

1) 領域の意図と担当科目内容を知り、課題の共有を図る：領域間の情報交換

本学部は専門の領域として、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、母性・小児看護学、地域・在宅看護学、精神看護学、看護管理学、があり、専門基礎の領域として医療管理学・医療情報学・看護情報学の8つの領域がある。研修を実施する前に、各領域で学問として目指しているもの、特に臨地実習上大事にしていることは何か、カリキュラムとして講義、実習にどのように関連させて教育しているのかを説明した。

実習施設の概要や実習の到達目標、他の領域での授業内容がわかり、カリキュラム全体の中で自分の担当する授業の位置づけが確認できた、既習の内容を臨地実習にどう活かすかなど、役立つものであったとの感想が寄せられた。完成年度を迎える年であり4学年全体を見渡すことができた。また、4年前期に集中して実施された領域別実習終了直後ということもあり、多くの教員の参加があり関心の高さが伺えた。

2) 領域を越えて課題の確認と解決策を見出す：グループワーク

全教員を対象としたグループワークは、教員の主体的な取り組みを助成するよう配慮するとともに、グループ編成においては、同じ領域や職位の人が重ならないよう調整した。グループ単位でのディスカッションは計4回行い、特定のテーマについて小グループ（1グループ5～6名）で検討するものである。参加教員は4つのグループに分かれて、考え方が積み上げられるように4回とも原則同じグループとした。テーマはグループ内で過去の実習指導での関わりを通して個人の実習経験から課題を見出す

とともに、グループで取り組む課題を設定することとし、研修のおおよその進め方について提示する程度とし、グループで自由な方法をとるように配慮し

た。グループワークでの検討内容については、記録し毎回終了時に報告時間を設け各グループごとに報告し、全体での共有を図った。

[表2] 研修の実際

1) テーマ『臨地実習指導』 2) ねらい 他領域との情報共有の場となり、各々が実習指導において抱えている問題について解決への糸口を見出し、次へのステップへとつながられるための場とする。 3) 目的 臨地実習指導における教師に必要な指導技術・態度について考え、教員それぞれの自分らしさを大切にしながら、創意・工夫を活かした実習指導能力を培う。 4) 目標 (1)教師に求められる教育的関わりについて学習する機会がもてる。 (2)各グループでの活動を通して実習経験を語り、情報を共有する。 (3)各グループでの活動を通して個人の課題を明確にする。 (4)実習指導における教師の役割について理解する。 (5)実習指導に必要な教育技法を理解し、個人の課題達成に向けて役立てる。 5) 研修：全教員対象				
月 日	時 間	研修テーマ	内 容	方法および場所
9月13日 (木)	13:00～ 14:00 <休憩> 14:10～ 16:00	「各領域で大切にしていること」 「それぞれの実習経験を語る」	1.各領域で実習上大事にしていることは何か。 2.各グループでの活動を通して実習経験を語り、情報を共有する。 ・前期あるいは過去の実習指導における自らの関わりについて振り返る。 3.個人の課題を明確にする。 ・自己の課題を明らかにし、グループとして今後どのように研修に取り組んでいけば良いか考える。	領域責任者による説明 一人7分 場所：4階ナースングスキルトレーニングセンター グループワーク (5グループに分かれて実施) 場所：大学院講義室Ⅰ・Ⅱ
10月9日 (火)	13:00～ 15:00 <休憩> 15:10～ 16:00	「課題達成に向けての取り組み」 グループ発表	実習指導における教師の役割について理解する。 ・各グループによって課題を抽出し、課題達成に向けての取り組み *当日の出席人数によりタイムスケジュール変更の可能性あり	グループワーク (4グループに分かれて実施) 場所：大学院講義室Ⅰ・Ⅱ グループ毎に発表 1G10分×4グループ
1月9日 (水)	13:00～ 15:20 <休憩> 15:30～ 16:00	「課題達成に向けての取り組み」 グループ発表	実習指導における教師の役割について理解する。 ・グループごとの課題達成に向けての取り組み	グループワーク グループ毎に発表 1G7分×4グループ
2月20日 (水)	13:00～ 16:00	「課題達成に向けての取り組み」 グループ発表 まとめ	1.実習指導における教師の役割について理解する。 ・グループごとの課題達成に向けての取り組みから、臨地実習における教師の役割について考える。 2.実習指導に必要な教育技法を理解し、個人の課題達成に向けての方向性について考える。	グループワーク (4グループに分かれて実施) 場所：大学院講義室Ⅰ・Ⅱ グループ毎に発表 1G10分×4グループ 各グループでの学びをもとに、各自で考え今後の臨地実習に活かす。

(1)1回目グループワーク (平成19年9月13日)

1回目のグループワークで行われた「それぞれの実習体験を語る」時間は、日頃感じている各教員の疑問を出し合い全体の課題として発展させていくプロセスとした。これは、前期あるいは過去の実習指導経験における自らの関わりを振り返ることで、個人の抱えている課題を明確にする目的からである。次いで、自己の課題から、全4回でのグループワークでグループとして取り組む課題へとつなげるようにした。

ここでは、各自の実習経験での体験や事例紹介などを自由に語りあうことができた。同様にメンバーの経験を聞きながら、他のメンバーから類似の体験が出るなど、意見・感想を述べ合うなどグループワークは自由に展開され充実したものとなった。

教員が実習指導において経験した主な指導上の課題には、

- ・学生のやる気を育てる関わり方
- ・教員のゆとりの必要性
- ・臨床側と教員とのコミュニケーションの困難さ
- ・学生の抱える問題（情緒的な問題、学習状況、健康状態）
- ・実習指導への不安に対するサポートの必要性
- ・タイムリーな指導の難しさ
- ・社会的ルールが守れず態度を指導しようと思う場合の指導に困った体験
- ・個別指導した学生への指導が適切であったのか不安が残る。
- ・コミュニケーション能力が乏しい、人間関係作りにおいて問題のある学生への指導のあり方や指導の負担感がある。
- ・学生の個別的背景を限られた実習期間だけで把握することは困難であり他の実習状況の情報が早めに提供されるとよい。

このように多くの悩みや不安を抱えながら実習指導を行っている教員は多かった。グループによってグループワークの方法は異なるものの助手や経験の浅い教員が不安などを表出できていたことも有意義な時間となっていたと思われる。終了後の参加者の感想からも、「経験を率直に出し合えた」、「違う人の体験が聞いて勉強になった」、「明るいグループで楽しかった」などの声が寄せられた。

(2)2・3回目グループワーク (平成19年10月9日、平成20年1月9日)

ここでは、実習指導における教師の役割について理解することを目標に、各グループで課題を見出し課題達成に向けての取り組みについて検討することである。各グループで以下の4つのテーマが決められた。

- ・臨地実習の場におけるコミュニケーション：患者・教員・学生・指導者の4者間のコミュニケーションの確立
- ・実習指導におけるゆとり教育の難しさ：自主性、主体性を育む難しさ
- ・学生・教育・カリキュラムの3要素の関係性
- ・体験事例による分析：教員としての自分の傾向を知る、患者・教員・学生・指導者との関係を振り返る。

このように患者を含めたコミュニケーションのあり方や実習指導におけるゆとり教育、というテーマを早々と決定しそれを中心にグループワークを進めていくグループや、助手の実習指導体験を学生、指導者、教員、患者の関係から整理し分析を加えていくという方法をとるグループ、実習目標の達成に向け学生、教育、カリキュラムの3要素により臨地実習の構成概念を検討するグループなどグループによる特色が出てきている。2回、3回とグループワークの回を重ねる毎に活気のあるディスカッションが行われていた。

終了後の参加者の感想では、自己評価ができてよかった、体験を共有できた、実習直後であり、語りやすかったと思う、などの反応が得られた。

(3)4回目グループワーク (平成20年2月2日)

3回のグループワークによる学びをまとめ発表する場とした。各グループで設定したテーマに沿って検討されたが、グループワークの時間については、計4回約10時間を使用したがあっと必要であったという意見も聞かれたものの、全てのグループが検討結果を発表することができた。

検討結果では、実習指導における教師の役割についてそれぞれ検討されており、教員に求められる能力には、看護実践能力、コミュニケーション能力、教育力が必要であるが、教員の能力には限界があり、臨床側との役割分担が重要であることを認識し

ておくことの必要性とともに、役割の違いについても検討されていた。具体的に場の把握や調整を行うこと、指導者との関係を作ること、到達度の確認などを十分に行うことなどが提示された。また、教員自身の能力向上には、学生に意図的な関わりを持つこと、場の経験を踏むことなども検討されていた。

全4回のグループワークでは、領域間の交流ができたことで学部内連携の必要性も確認できた。また、グループワークの中では、アドバイスを受ける機会になっていたこともあり助手や教育経験の浅い教員の学びの機会となっていた。

全ての研修を通して教員各人が指導経験を振り返り、他者と検討を深める過程において自己の課題を少なからず明確にできた。

(4)助手を対象とした研修会（平成19年12月25日）

[表3]

本学部は教育経験の浅い助手が多いことから、助手対象の研修を別途開催した。

本研修会は、「臨地実習指導における指導効果と求められる教員の資質」をテーマにすえ、①実習指導経験をもとに、学生とのかかわり方、学生把握について想起し、学生への指導効果を客観的に分析する②臨地実習指導において求められる教員の資質および自己の課題を明らかにする、2点の目的をもって実施された。研修会が実施された期間は、基礎看護学実習Ⅱから約10日経過した時期であったため、参加した助手それぞれが、基礎看護学実習Ⅱで担当した実際の事例をもとに「学生の把握をどのように行ったか」を意識しながら意見交換をした。また他の研修会と異なり、助手が対象となってグループワークを実施した。各グループには教学委員会実習担当教員またはFD委員から1ないし2名の講師以上の教員がアドバイザーとして参加した。

これまでの研修会と異なり、経験も近く同じような立場である助手同士が集まり話し合いを持つことで、グループメンバーの意見をより共感的に聴くことができた。また共感的に聴いてもらえたという経験から、実習から経過した時間が短く辛い状況のままである参加者にとっても癒しの経験にもなっていた。また、教員の資質のひとつとして教材化能力に関しては、学生の具体的な経験が学生にとってどのような意味を持つか焦点を当て意味づけを深める

教育を実践するための方法について検討が進められた。さらに、アドバイザーからも具体的な指導経験が提示され、指導上のヒントも得られた。研修に先立ち、課題として「学生の把握」や「臨地実習において教員に求められる資質」、「自己の傾向」、「文献などを使用してより客観的に分析する」、などについて情報収集、整理を行った後参加していたことで、メンバーやアドバイザーからの意見をより客観的に受け止められ、視野を広げる貴重な機会となった。また、本研修会の前後に全教員を対象とした研修会が企画されていたことから、本研修会で言語化された学びや経験を、全教員を対象とした研修会で提供するまでに高められた。

[表3] 助手を対象とした研修会

- 1) テーマ『臨地実習指導における指導効果と求められる教員の資質』
- 2) 目的
 ①実習指導経験をもとに、学生とのかかわり方、学生把握について想起し、学生への指導効果を客観的に分析する。
 ②臨地実習指導において求められる教員の資質および自己の課題を明らかにする。
- 3) 対象者
 助手 *実習担当委員およびFD委員会委員は、アドバイザーとして参加する。
- 4) 研修方法
 平成19年12月25日(火) 9時30分～17時
 研修内容・タイムスケジュール

時 間	項 目	概 要	
9:00～9:15	オリエンテーション	研修の進め方	全 体
9:15～10:45	グループワーク 実習指導体験をもとに学生との関わり方、学生把握についての想起	学生との相互作用における自己の関わり方を振り返るとともに、学生をどのように把握していたかについて考えてみる。	全 体
10:45～11:00	休憩		
11:00～12:00	グループワークの続き 実習指導体験をもとに学生との関わり方、学生把握についての想起	学生との相互作用における自己の関わり方を振り返るとともに、学生をどのように把握していたかについて考えてみる。	全 体
12:00～13:00	昼休み		
13:00～14:30	学生への指導効果	学生の成長を何によって確認してきたかについて、できるだけ自己を客観視しながら振り返ってみる。	個 人
14:30～14:45	休憩		
14:45～15:45	発表・意見交換	本日の研修課題について相互に考えを深める。	全 体
15:45～17:00	まとめ 臨地実習において教員に求められる資質と自己の課題の明確化	これまでのプロセスを通して、臨地実習において求められる教員の資質についてまとめ、一般論との比較を試みる。 それをもとに、自己の課題を明確にし、今後どのような取り組みが必要かを明らかにする(レポート)。	個 人

3) 講演会の実施：FDに関して共通理解を図る。

(平成19年11月28日)

本学部では、FD活動を開始したばかりであり、教職員がFDに関して共通理解をもつことが大切と考え、学外講師を招きFD活動に関する講演会を開催した。近隣の看護系大学・短大、実習病院等にも案内状を送付した。講師には和住淑子先生（文部科学省高等教育局医学教育課看護教育専門官）を招き、演題『看護系大学においてFD活動が求められる背景』について、大学教育における課題とFDの必要性をわかりやすく説明いただいた。FDについては教員の理解に差がみられたが、講演を聞く事でFDへの理解が深まった。また、近隣大学・短大、実習施設等の人との交流ができ非常に意義深い研修であった。

IV. 考 察

1. 教員のニーズに沿う研修のもたらす意味

大学教員に於いては、自らその資質や力量を開発していくことが不可欠であり、個人だけでなく組織として教員全体の資質向上を目指すことがFD活動の目的である。看護という専門職を目指す教員には、看護実践能力、看護を概念化する能力、学習の

機会を提供する能力、学生を理解する能力と学生の反応に的確に対応できる能力、調整する能力、の大きく5つが教員として求められる能力として挙げられる〔表4参照〕。これらの5つの能力を発揮するためには、必要な知識とともに、教育方法、教育評価、科目間調整などの知識・技術が必要となる。今回の研修はFD委員会が設定したテーマで研修を開始するのではなく、まず教員のニーズを把握して、研修を企画したことで教員が主体的に研修に参加することができたものとする。また、教員各自が自分の体験を語る時間を設けたことも討議したいという雰囲気や意欲を高められたことにつながったと思われる。また、助手や教育経験の浅い教員は、一連のグループワークにおいて先輩からのアドバイスを受けながら思考を整理することができていたが、このような学習の機会となったのもグループワークの効果といえよう。

助手を対象とした研修は、教育経験の浅い教員が多いことで全体の研修の中間で実施した。実習体験を想起できる時間を改めて設定したことで、全教員対象の研修会でも役立てられたとともに、教育経験の浅い教員に対しての研修企画に今後も活かしていくことが望まれる。

[表4] 実習指導をするうえで看護教員に求められる能力

求められる能力	包含される内容	希望項目(アンケート)との関連
(1) 看護実践能力	患者理解、看護技術 看護過程の展開、コミュニケーション 実践モデル、安全 (学生、患者)	人間関係 演習指導 教育方法 (指導案作成含む)
(2) 看護を概念化する能力	看護理論、研究的手法	教育評価 教育方法
(3) 学習の機会を提供する能力	指導方法、教材化 (意味づけ、意識化)、 教育技法 (発問と質問の使い方、カンファレンスにおけるグループダイナミクスの活用法、 実習記録の活用法、記録へのコメントの書き方、課題の提示の仕方など)、評価、レディネス把握	科目間調整 教育評価 教育方法 (指導案作成含む)
(4) 学生を理解する能力と学生の反応に的確に対応できる能力	教員の实習指導前の関わり・準備、レディネス把握 状況把握能力	科目間調整 教育評価 教育方法 (指導案作成含む)
(5) 調整する能力	実習施設、実習指導者との連絡調整 関係作り、状況把握能力	人間関係 教育評価

* 文献²⁾を参考に筆者が作成

2. 研修から見えてきた実習指導の課題

教員のアンケート調査結果やグループワークでの課題に挙げられている、タイムリーな指導の難しさや学生のやる気を育てる関わり方などは、発問の方法やカンファレンスの持ち方など具体的な教育技法に自信がなく不安や困難さという形で表出されている。これらの教育技法は、教員として求められる能力の中でも学生に学習の機会を提供する能力や学生を理解する能力と学生の反応に的確に対応できる能力に包含されるものである〔表4〕。この教育技法や教材化（学生の体験を意味づけする、意識化させる）においては、教員と学生との関係だけでなく、指導者と教員との関係にも影響するものである。それゆえ、教員が困難さを感じやすい問題といえよう。具体的な指導方法や事例をとおして体験した事柄を教材化する上において、教師の意図が指導者に十分伝わらないことで、教授と学習過程のずれが生じやすいところである。これらのことを考えると、指導者との役割の明確化が求められる。研修の中でも全てのグループが課題の中に、指導者との役割、学生の意欲や主体性を育むことの重要性と指導の難しさを指摘している。これらは重要な課題であり、今後のFDにも繋げていく必要がある。

1) 指導者、教員の役割分担

教員として求められる能力として連絡調整の役割がある。本学部の実習指導背景にもあるように、病院施設を持たないため、実習施設が分散している。そのために教員1人の関わる実習施設が複数となり、関係作りにはかなりの時間を要している。コミュニケーションの重要性は承知していても、教員の経験から指導者との役割分担において課題を持つものが少なかった。教員は「学生の意思を尊重する」という思いが優先されるが、指導者は当該実習の目標達成に目が向けられ「学習状況を把握すること」が優先されることがある。教員は実習をカリキュラム全体の目標達成のプロセスと認識しているため、当該実習の達成目標より学生個人の成果をみるようにしていること、これに対し指導者は当該実習の目標達成に向けられているために、教員と指導者間の考え方のずれが生じる。このような違いは指導方法に影響を与えやすい。教員は学生の学習進度、個人の学習状況などを指導者側に伝えていく役割をもち、学生の情報提供も含め教員は連絡調整能

力が求められる。教師と指導者のお互いの役割を認識し、協力し合って学生を支援していく必要がある。グループワークでは、指導者との関係作り、役割分担など、学生に何をどのように学ばせたいのか検討されており、今後も指導方法も含めて役割分担と関係作りについての検討が不可欠であろう。

2) 学生の主体性を育む行動特性への教員の関わり

今回の研修では、教員からニーズを把握したことで、学年進行に合わせたタイムリーな課題に取り組むことができた。前期の実習での体験や後期の実習での体験をもとに語る中で、学生の自主性や主体性についても考えられていた。学生自ら何かに向う積極的な姿勢・行動について問題点や具体的な対策・工夫提示が一部ではあるが提示できていた。教育の前提として、教育は価値や知識を授けることではなく、自己教育を促す手段であるということ（学習主体主導の教育）である。そして、知識と体験の統合と教育環境整備が挙げられる。知識や技術は教育の効果がしやすいものである。一方、看護する意思や使命感、実践する勇気、思考の整理、柔軟性などは教育の効果として現れにくい。実習では、このようなコンピテンシー（行動特性）に発展していく力をどう育むかが大きな課題である。

今回の研修では、実際の臨地実習をもとに、体験を意識化し概念化する作業を行うことができ、各教員の臨床実習における自己の課題が明確となったことは確かであろう。今後も指導方法、教材化等については、教員自らの成長のためには十分な指導支援体制などの環境作りも必要であると考えられる。また、領域を超えてグループワークを4回持ったことで、個人として教育能力開発の視点と組織としての教育能力開発への両方の意味を確認できたと考えられる。教育者として自ら成長していくためには、このようなFD活動が全学的に施行され、学部内での支援が行われることでより質の高い教育能力の開発がはかれるものと考えられる。

おわりに

本学部においてのFD活動は開始されたばかりであり、研修で取り上げたい課題は多い。今回は希望の多かった「臨地実習指導」をメインテーマに据えたが、臨地実習指導は大きな課題であり、今後も適宜取上げていく必要がある。また、今回取上げられ

なかった課題についても、今後計画的に取り組んでいく必要がある。また、本学では助手が多いため、全体で教育力の向上を図るためには、助手から助教へのステップアップに役立つような研修も必要と考える。

今後は、多くの教員が研修会の意義を認識できるよう働きかけるとともに、教育・研究の向上を目指すためには、さらに魅力的な研修を企画・運営していくことが必要である。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省：大学にける看護実践能力の育成の充実に向けて、看護教育の在り方に関する検討会報告 32-33, 2002
- 2) 唐沢由美子：臨地実習指導におけるFD、看護展望 31(3): 43-49, 2006